

理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ および対処について

—アイデンティティ・ステータスの差による検討—

姜 信善・相川 一哉*

The Cognition and Strategy for Discrepancy between Ideal Self and Actual Self

—From the View Point of Differences in Identity Status—

Sinsun KANG, Kazuya AIKAWA*

キーワード：理想自己，現実自己，ズレ，とらえ及び対処，アイデンティティ・ステータス
keywords：ideal self, actual self, discrepancy, cognition and strategy, identity status

問題および目的

私たちは、普段あまり自己に注目する機会がないように思われるが、現実には多くの場面で自己に注意を向けている。人は自己に注意が注がれると、理想の自己と現実の自己との不一致を経験する。Higgins (1987) は、理想と現実との不一致と特定の感情との結びつきに関する理論 (self-discrepancy theory) を提唱している。その後、理想自己と現実自己との不一致に関する研究は、遠藤 (1992) などに見られるように理想自己と現実自己の不一致が自尊感情や自己受容などの適応の指標との関連について扱う、ズレの持つ適応的側面に関する研究が行われてきた。一方、ズレの持つ自己形成的側面に焦点を当てる研究も見られるようになった。山田 (2004) は、なりたい理想像からのズレの大きさは、高い現実検討能力を有し、自己を批判的に見つめることができるために設定されるものであり、自分をもっと高めたいという“成熟へのしるし”としても機能しているのではないかと述べている。例えば、理想自己と現実自己とのズレの認識を水間 (1998) は「自己形成意識」、安達・菅宮 (2000) は、「自己成長意欲」として概念化し、ズレの持つ自己形成的側面について検討を行った。しかし、理想自己と現実自己とのズレの自己形成的側面からの検討においては、自己形成的側面が、対象に向かっていきたいとする意欲的・意志的側面からのみ捉えられていることを山田 (2004) は問題点として挙げ、理想自己が

本人にとってどのような意味を持っているのかといった意味づけの視点と、対象に対する意欲が喚起されると、その先には実際にどういった方略が取られているかといった行為の視点とが共に考慮されるべきであると述べている。そのようなことから、本研究では、理想自己と現実自己とのズレについて、ズレをどのようにとらえるのかという意味づけの観点と、また具体的にはどのような方略を用いて対処しているのかという行為の観点の2つの観点から理想自己と現実自己とのズレの自己形成との関連について検討を行う。また、そのような形で自己に注意が向くと、次に人は自己の状態や特徴、様子等を自分なりに描いたり、概念づけたりするようになる。これは、自己概念 (self-knowledge) と呼ばれるものである。この自己概念につながるものとして、アイデンティティの確立が挙げられる。「自分はどのような存在であるのか」という問いに確かな答えを持つことができれば、自分自身がどのような人間であるのかという位置づけが自分の中ででき、そのようなことが自己を形成していくことにつながると考えられる。

そこで、本研究では、アイデンティティ・ステータスの差により、理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処がどのように異なるのかを調べる。そのことからアイデンティティ・ステータスによって、理想自己と現実自己とのズレはどのようにとらえられ、具体的にどのような対処がなされるのかを明らかにすることができ、自己概念の形成について

*富山大学教育学研究科学校教育専修

何らかの示唆が与えられるのではないだろうか。この点について検討することが、本研究の目的である。

ここで、アイデンティティ・ステイタスに関しては、Marcia, J.E (1966)により、危機 (crisis) の経験の有無、つまりいかなる役割、職業、理想、イデオロギー等が自分にふさわしいかについて迷い考え試行する時期の有無と、自己投入 (commitment) の有無、すなわち自己を実現し自己を確認するための、特定の活動に積極的に傾倒したかの有無との2次元を組み合わせて、4つの類型に分類された (Table 1 参照)。

これに対して、加藤 (1983) は、同一性達成地位と権威受容地位とは過去の危機の有無によって判別されるのに対し、積極的モラトリアム地位は、明確な自己投入の対象を求めて現在危機のさなかにいる、というように、危機には過去のそれと現在のその2つが含まれている。また、積極的モラトリアム地位を特徴づける現在の危機は、将来への展望を伴ったものであることが必要であろうと述べ、『現在の自己投入』『過去の危機』『将来の自己投入の希求』

の3変数を測定し、同一性地位を判定した (Table 1 参照)。この加藤 (1983) が作成した同一性地位判定尺度は、Marcia, J.E (1966, 1980) が提示した同一性地位概念を検討整理し、その客観的な判定を可能としたものであることから、本研究では加藤 (1983) の同一性地位判定尺度を用いてアイデンティティ・ステイタスを測定する。なお、以下の本研究での結果及び考察の本文において、理想自己と現実自己とのズレを理想-現実ズレと省略することとする。

I. 予備調査 (研究1)

目的

予備調査では、実際に理想自己と現実自己とのズレをどのようにとらえており、またどのように対処していくのかを調べる。それにより、理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処についての測定項目をそれぞれ作成することを目的とする。

方法

1. 対象者：大学生計260名 (男子73名 女子187名)

Table 1 アイデンティティ・ステイタスの分類

	地 位	分類及び基準となる値	
		危 機	傾 倒
Marcia (1966) による分類	(1) 同一性達成地位 (identity achievement status)	経験した	している
	(2) 権威受容地位 (foreclosure status)	経験していない	している
	(3) 積極的モラトリアム地位 (moratorium status)	その最中	しようとしている
	(4) 同一性拡散地位 (identity diffusion status)	経験していない 経験した	していない していない
加藤 (1983) による分類及び基準となる値	(1) 同一性達成地位	『現在の自己投入』の値が20以上かつ『過去の危機』の値が20以上の場合	
	(2) 同一性達成-権威受容中間地位 (A-F 中間地位)	『現在の自己投入』の値が20以上かつ『過去の危機』の値が19~15の場合	
	(3) 権威受容地位	『現在の自己投入』の値が20以上かつ『過去の危機』の値が14以下の場合	
	(4) 積極的モラトリアム地位	『現在の自己投入』の値が19以下かつ『将来の自己投入の希求』の値が20以上の場合	
	(5) 同一性拡散地位	『現在の自己投入』の値が12以下かつ『将来の自己投入の希求』の値が14以下の場合	
	(6) 同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位 (D-M 中間地位)	『将来の自己投入』の値が19以下かつ「同一性拡散地位」の条件に当てはまらない場合	

2. 調査時期：2007年6月～7月
3. 調査内容：理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処に関して、「あなたは、理想自己と現実自己とのズレについてどのようにとらえていますか。」「理想自己と現実自己とのズレを感じる時にあなたは実際にどう対処していきますか。具体的に書いてください。」という質問に対して、自由記述により回答が求められた。

結果

1. 項目内容の収集

ここでは、理想－現実ズレに対する①とらえ及び②対処についての回答内容に関して詳細に検討していくこととする。

①理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえについて

収集された回答内容を、次のように大きく5つのカテゴリーに分類することができた。まず一つ目は、理想－現実ズレを受け入れ、目標や指針としてとらえている、『目標としての受け入れ』であった。具体的には、“理想を自分のなりたいたいものとして受け入れている。”のような内容が挙げられた。

二つ目は、理想－現実ズレを受け入れ、実践すべきものとしてとらえている『実践としての受け入れ』であり、具体的な内容として“ズレを埋めようと努力することが人の成長だと思う。”という内容が挙げられた。

三つ目は、理想－現実ズレについて自分を非難の対象としてとらえている、『自己非難』の内容であった。具体例として、“理想自己とズレがあるので自分が駄目だと思う。”が含まれていた。

四つ目は、理想－現実ズレをあっても仕方がないものとしてとらえている、『諦め』であった。“理想はあくまでも理想であるから、しかたがない。”が具体的な内容として挙げられた。

五つ目は、理想－現実ズレを努力によって埋められるもの、改善できるものとしてとらえている、『有能感』の内容であった。具体的には、“努力すればうめられるもの”が挙げられた。

②理想自己と現実自己とのズレにおける対処について

まず一つ目は、理想に近づくように自分と見つ

めあい、自分を励まし、理想に近づいていこうとしている、『理想への接近意志』であった。具体的には、“理想に近づくために、将来へ向かって頑張りたい。”といった内容が挙げられた。

二つ目は、理想へ近づくために何ができるかを考え、実行に移す、『理想実現のための実践』であった。具体的な例として、“理想自己に近づけるように、最初は小さなことから実践してみる。”という内容の回答が見られた。

三つ目は、どのような方法であれ、切り替えて理想を現実にならせる。理想を下げる。つまり、『理想の割引』であった。具体的には、“理想を下げて、現実味のある理想を設定する。”という内容が挙げられた。

四つ目は、理想－現実ズレの解決に迷いが生じ、ズレの解決をどのようにしていけばよいのか悩んでいる、『葛藤』を感じる内容であった。具体的な例として、“ズレをなくそうと焦って頑張るか、何もせず諦めるか両方を考えて悩む。”が挙げられた。

2. 測定項目の作成・検討

予備調査から分類されたカテゴリーについて再検討し、研究の目的に合わせて項目の作成を行った。各項目についてはその内容に注意を払い、作成された。調査対象者が回答しやすいよう、問題点がある場合は修正・削除を行った。最終的に理想－現実ズレのとらえについては35項目が、理想－現実ズレの対処については28項目が、測定項目とされた。

II. 本調査(研究2)

1. 理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処に関する尺度の作成(研究2-1)

目的

予備調査により作成された測定項目を用い、理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処の尺度を作成することを目的とする。

対象者：大学生計439名(男子186名、女子252名、不明1名)

調査時期：2007年12月中旬～下旬

調査内容：予備調査で収集された理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処に関する項目について、それぞれ「当てはまる」「やや当てはまる」「どちらでもない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」

い」の5点～1点の5件法で回答が求められた。

結果

(1) 理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえについて

予備調査の結果をもとに作成された理想－現実ズレのとらえに関する質問項目についての因子分析を行い、固有値の減退状況などから、4因子を

仮定することができた。バリマックス回転後の因子パターンはTable 2-1-1に示す。累積寄与率は47.1%であった。

第1因子は“理想とする自分は、自分の目指すものなので、ズレがあるからこそ頑張りたいと思う。”などの項目で構成され、理想－現実ズレを受け入れ、努力していききたい、という内容が含まれている。そこで、第1因子は「ズレの受け入

Table 2-1-1 理想－現実ズレ¹⁾のとらえに関する項目の因子分析結果

No	項 目 内 容	F1 ²⁾	F2 ³⁾	F3 ⁴⁾	F4 ⁵⁾	h ²
		.689	.316	.142	-.037	.597
26	理想の自分とのズレは自分がなりたいたい道を示してくれるので、前向きに考えていきたい。	.689	.314	-.060	-.084	.583
16	自分が描く理想と今の自分がズレているからこそ、ズレを埋めることを意識していきたい。	.677	.196	.176	-.090	.536
27	理想と今の自分にはズレがあるが、常に理想の自分を追求していきたい。	.661	.242	.150	-.227	.570
11	理想とする自分と今の自分が違うから、努力のしがいがある。	.617	.313	-.127	-.139	.514
1	理想とする自分は、自分の目指すものなので、ズレがあるからこそ頑張りたいと思う。	.609	.173	-.065	-.119	.419
12	自分の理想に近づくために、一つ一つの事に責任を持って取り組みたい。	.592	.209	-.003	-.119	.409
7	理想の自分になるように心がけて、物事と接していきたい。	.592	.183	.140	-.252	.467
6	理想があるからこそ、今の自分は前に進んでいきたいと思う。	.573	.348	-.045	-.110	.464
22	理想の職業は今の自分から遠いものだが、理想へ至るための努力をし、成長していきたい。	.535	.178	.137	-.204	.378
32	理想自己と現実自己のズレを、自分自身の力で埋めていきたいと思う。	.495	.311	.240	-.346	.519
2	理想の職業に就くには大きな努力が必要であり、少しずつ努力していきたい。	.487	.236	.040	-.229	.347
25	今はたとえズレがあっても、できることをやっていけばズレはなくせると思う。	.305	.726	-.018	-.065	.624
15	物事を一つずつこなしていけば、ズレは埋められると思う。	.321	.644	.115	-.001	.531
5	日々理想を目指していけば、理想の自分になれると思う。	.264	.631	.024	-.045	.471
10	努力していけば、いつかは理想の自分に近づくことができると思う。	.306	.618	.005	-.207	.519
20	地道にこつこつ頑張ることで、理想の自己像に近づいていけると思う。	.375	.607	-.025	-.126	.525
29	今の自分が、なりたいたい自分に近づくのは、不可能だと思う。	-.107	-.445	.445	.422	.585
28	いつまでたっても理想に近づけないので、自分を責める。	.085	-.021	.791	.044	.635
8	理想の自分に近づきたいが、近づけない自分は駄目だと思う。	.032	-.026	.702	-.140	.515
13	理想自己と今の自分があまりにも違うのは、自分が怠けているせいだと思う。	-.006	.018	.637	-.050	.409
33	理想の自分に今の自分は近づけていないので、今の自分を認めたくない。	.037	-.009	.577	.099	.344
23	自分が描いた理想どおりにいかないのは、自分の見通しが悪いからだと思う。	.060	-.011	.544	.028	.300
3	自分の理想よりも物事ができないのは、自分に原因がある。	.034	.070	.446	-.161	.231
19	理想と現実がズレていても気にしないので、特に何かをしようとは思わない。	-.406	-.022	-.129	.663	.621
14	理想が高すぎるから、今の自分は理想どおりのことができなくても構わない。	-.115	-.010	-.046	.584	.357
9	ズレがあっても気にとめないで、何も行動をしなくても良いと思う。	-.434	-.021	-.176	.569	.543
4	理想は理想。近づけなくても仕方がない。	-.181	-.266	-.086	.549	.412
34	理想の自分を求めても、理想は自分から遠いものだから、なれるわけがない。	-.236	-.399	.305	.507	.565
24	理想どおりの自分になるのは非常に難しいので、理想どおりになるとは思わない。	-.107	-.469	.085	.493	.481
因子負荷固有値		10.536	3.230	1.517	1.203	
因子寄与率（累積寄与率）		30.1	9.2	4.3	3.4	(47.1)
α係数		0.91	0.60	0.79	0.80	

¹⁾理想自己と現実自己とのズレ ²⁾「ズレの受け入れ」 ³⁾「有能感」 ⁴⁾「自己非難」 ⁵⁾「諦め」

れ」と命名された。第2因子は“今はたとえズレがあっても、できることをやっていけばズレはなくせると思う。”などの項目で構成され、自分なら努力すれば理想の自分になることができる、などの内容が含まれる。そこで、第2因子は「有能感」と命名された。第3因子は“いつまでたっても理想に近づけないので、自分を責める。”などの項目で構成され、理想-現実ズレが生じているのは自分の責任であり、自分が悪い、という内容が含まれる。そこで、第3因子は「自己非難」と命名された。第4因子は“理想は理想。近づけなくても仕方がない。”などの項目で構成され、理想は理想であるから、理想になれないのは当然であり、諦めている、のような内容が含まれ、第4因子は「諦め」と命名された。

因子仮定後に Cronbach の α 係数を算出したところ、因子ごとの α 係数は第1因子、第2因子、第3因子、第4因子それぞれにおいて順に、0.91、0.60、0.79、0.80であり、第2因子を除いた全ての因子において、高い信頼性が得られたと言えよう。以下の本研究において、これを理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ尺度とする。

(2) 理想自己と現実自己とのズレにおける対処について

理想-現実ズレの対処に関する質問項目についての因子分析を行い、固有値の減退状況などから、3因子を仮定することができた。バリマックス回転後の因子パターンは Table 2-1-2 の通りであり、累積寄与率は41.5%であった。

第1因子は“理想に向かって今の自分ができる

Table 2-1-2 理想-現実ズレ¹⁾の対処に関する項目の因子分析結果

No	項 目 内 容	F1 ²⁾	F2 ³⁾	F3 ⁴⁾	h ²
32	理想に向かって今の自分ができることに、一つ一つ取り組む。	.724	-.181	-.154	.581
22	理想を具体的にイメージし、少しでも近づける方法を模索、実行する。	.721	-.094	-.155	.553
31	物事を前向きに考えて、なんとか理想に近づけるように努力したい。	.719	-.132	-.117	.548
21	自分の良くないところを意識し、理想に近づけるよう自分を改善させていきたい。	.660	-.094	-.081	.451
16	なりたい人間像に近づくために、物事と誠実に向き合いたい。	.654	-.179	.020	.460
17	理想の人間像に近づくために、日頃の行いを改める。	.642	-.056	.058	.419
11	自分が理想としている事は絶対にできるという思いで、理想に向かっていきたい。	.636	-.067	-.156	.433
7	理想を目指して、納得するまで現実自己を修正していく。	.631	-.062	-.179	.434
6	今の自分を励まし、次こそは成し遂げるよう頑張りたい。	.595	-.078	-.108	.371
12	理想を叶えるための第一歩として、理想に結びつく事柄の経験を試みる。	.591	-.106	-.138	.380
26	過去よりも未来を見据え、理想を実現させていきたい。	.577	-.103	-.051	.346
27	理想に近づけるように、他人の良いところを見本にして、自分の振る舞いを改善する。	.573	.319	.031	.330
1	自分が就きたい職業に就くために、最善の方法を模索していきたい。	.454	-.170	-.131	.252
2	理想の実現のために必要な知識を、本などの具体的な資料を通して習得する。	.414	.008	-.127	.188
4	理想自己は今の自分ではとてもなれないので、より妥当な理想自己に変える。	-.052	.794	.131	.651
9	今の理想は高すぎるので、今よりも達成しやすい理想に切り替える。	-.063	.692	.126	.499
34	今の理想自己は自分に厳しすぎるので、もう少し易しい理想自己を新しく決める。	-.053	.634	.180	.437
24	今の理想を焦って求める必要はないので、より自分に近いものを理想とする。	-.067	.587	.080	.355
19	今の理想よりも、努力をしなくて済む理想自己を求める。	-.281	.563	.357	.524
29	今よりも可能性があるものを、理想の人間像とする。	.157	.538	.118	.328
3	他の事をして、ズレの解決のことは忘れる。	-.208	.490	.272	.357
25	理想に近づきたいが、理想になれるかどうか悩み、どうしてよいか分からない。	.068	.056	.657	.439
20	なるべく理想に近づきたいと思っていても、心の中には諦めの気持ちがある。	-.175	.298	.573	.449
10	ズレをなくそうと焦って頑張るか、何もせず諦めるか。両方を考えて悩む。	-.077	.296	.560	.407
5	理想の職業に就きたいと思うが、面倒な就職活動は、やる気にならない。	-.367	.194	.439	.365
因子負荷固有値		9.871	3.648	1.001	
因子寄与率(累積寄与率)		28.2	10.4	2.9	(41.5)
α 係数		0.90	0.83	0.68	

¹⁾理想自己と現実自己とのズレ ²⁾「理想への接近」 ³⁾「理想の割引」 ⁴⁾「葛藤」

ことに、一つ一つ取り組む。”などの項目で構成され、理想に向かって自分ができることから実行する、のような内容が含まれている。そこで、第1因子は「理想への接近」と命名された。第2因子は“今よりも自分に近いものを、理想の人間像とする。”という項目で構成され、今の理想像より妥協した理想像を理想として設定する、などの内容が含まれている。そこで、第2因子は「理想の割引」と命名された。第3因子は“理想に近づきたいが、理想の自分に近づけるかどうか悩み、どうしてよいか分からない。”のような項目で構成され、理想には近づきたいが今現在の自分を考えるとどうしたら良いのかと悩む、などの内容が含まれている。そこで、第3因子は「葛藤」と命名された。

因子仮定後に Cronbachの α 係数を算出したところ、因子ごとの α 係数は第1因子、第2因子、第3因子、それぞれにおいて順に0.90、0.83、0.68という値を示し、第3因子を除いた因子において、高い信頼性が得られた。以下の本研究において、これを理想自己と現実自己とのズレにおける対処尺度とする。

2. 『将来の自己投入の希求』『現在の自己投入』『過去の危機』が理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処に及ぼす影響についての検討(研究2-2)

目的

加藤(1983)は、同一性地位の判定において、『将来の自己投入の希求』『過去の危機』『現在の自己投入』という3つの変数を測定し、その組み合わせによって同一性地位の判定を行った。尺度の中では、『現在の自己投入』については「目標の自覚・努力」を、『過去の危機』については「疑問・迷いと決断」、『将来の自己投入の希求』については「意欲と探索」をその内容とする項目群がそれぞれの時制において作成されている。この尺度を用いることによって、現在の自己投入および将来希求している

自己投入の程度と、過去の危機の経験の程度の、3つの変数それぞれが理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とする。

調査時期・対象者：研究2-1と同様

調査内容

- ①『将来の自己投入の希求』『現在の自己投入』『過去の危機』の3つの変数についての測定
加藤(1983)によって作成された同一性地位判定尺度の『将来の自己投入の希求』『現在の自己投入』『過去の危機』について測定する。
- ②理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処について
研究2-1で作成された理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処尺度を用いる。

分析手続き：まず、加藤(1983)の同一性地位判定尺度の各下位尺度項目『将来の自己投入の希求』『現在の自己投入』『過去の危機』の各項目合計得点と研究2-1で作成された理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処尺度の下位尺度項目合計得点との相関関係を求める。

次に、『将来の自己投入の希求』『過去の危機』『現在の自己投入』が理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処に及ぼす影響について検討するため、重回帰分析を行う。

結果

(1) 『将来の自己投入の希求』『過去の危機』『現在の自己投入』と理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処との関係

(1-1)理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえとの相関関係

『将来の自己投入の希求』『過去の危機』『現在の自己投入』と理想-現実ズレのとらえとの有意な相関関係についてみると(Table 2-2-1参照)、

Table 2-2-1 現在¹⁾・過去²⁾・将来³⁾の3変数の値と理想-現実ズレ⁴⁾のとらえ尺度各因子項目合計得点との相関関係

	「ズレの受け入れ」	「有能感」	「自己非難」	「諦め」
『現実の自己投入』	.505**	.289**	-.156*	-.465**
『過去の危機』	.261**	.099*	.219**	-.230**
『将来の自己投入の希求』	.516**	.322**	.088	-.472**

**p<.01, *p<.05

1)『現在の自己投入』 2)『過去の危機』 3)『将来の自己投入の希求』 4)理想自己と現実自己とのズレ

『将来の自己投入の希求』において、「ズレの受け入れ」「有能感」との間に正の相関関係が（順に $r=0.52$, $r=0.32$ ）, 「諦め」との間に負の相関関係がそれぞれ見られた ($r=-0.47$)。『過去の危機』において、「ズレの受け入れ」「有能感」「自己非難」との間に正の相関関係が（順に $r=0.26$, $r=0.10$, $r=0.22$ ）, 「諦め」との間に負の相関関係が示された ($r=-0.23$)。『現在の自己投入』において、「ズレの受け入れ」「有能感」との間に正の相関関係が（順に $r=0.51$, $r=0.28$ ）, 「自己非難」「諦め」との間に負の相関関係が見られた（順に $r=-0.15$, $r=-0.47$ ）。

(1-2) 理想自己と現実自己とのズレにおける対処との相関関係

『将来の自己投入の希求』『過去の危機』『現在の自己投入』と理想-現実ズレにおける対処との有意な相関関係については次の通りである (Table 2-2-2 参照)。まず、『将来の自己投入の希求』において「理想への接近」との間に正の相関関係が ($r=0.52$) , 「理想の割引」「葛藤」との間に負の相関関係が示され (順に $r=-0.24$, -0.19) , 『過去の危機』において「理想への接近」との間に正の相関関係が示された ($r=0.22$)。また、『現在の自己投入』において「理想への接近」との間に正の相

関関係が ($r=0.57$) 示され, 「理想の割引」「葛藤」との間に負の相関関係が得られた (順に $r=-0.31$, -0.46)。

(2) 『将来の自己投入の希求』『過去の危機』『現在の自己投入』の理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処への影響

(2-1) 理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえに及ぼす影響

重回帰分析の結果についてみていく (Table 2-2-3, 図1 参照)。

まず, 理想-現実ズレのとらえ第1因子「ズレの受け入れ」においては, 『将来の自己投入の希求』の偏回帰係数は (β)= $.33$ ($t(404)=6.76$, $p<.001$, 両側検定) であり, 『現在の自己投入』の偏回帰係数は, (β)= $.33$ ($t(404)=7.12$, $p<.001$, 両側検定) であった。『過去の危機』の偏回帰係数は, (β)= $.05$ ($t(404)=1.03$, n.s., 両側検定) となり, 有意ではなかった。なお, この時の回帰式全体の説明率は, $R^2=.34$ であり有意であった ($F(3,404)=71.08$, $p<.001$)。

次に, 理想-現実ズレのとらえ第2因子「有能感」の場合, 『将来の自己投入の希求』の偏回帰係数は, (β)= $.25$ ($t(407)=4.55$, $p<.001$, 両側検定) であり, 『現在の自己投入』の偏回帰係

Table 2-2-2 現在¹⁾・過去²⁾・将来³⁾の3変数の値と理想-現実ズレ⁴⁾の対処尺度各因子項目合計得点との相関関係

	「理想への接近」	「理想の割引」	「葛藤」
『現実の自己投入』	.571**	-.309**	-.455**
『過去の危機』	.222**	-.037	.013
『将来の自己投入の希求』	.522**	-.242**	-.193**

** $p<.01$

¹⁾『現在の自己投入』 ²⁾『過去の危機』 ³⁾『将来の自己投入の希求』 ⁴⁾理想自己と現実自己とのズレ

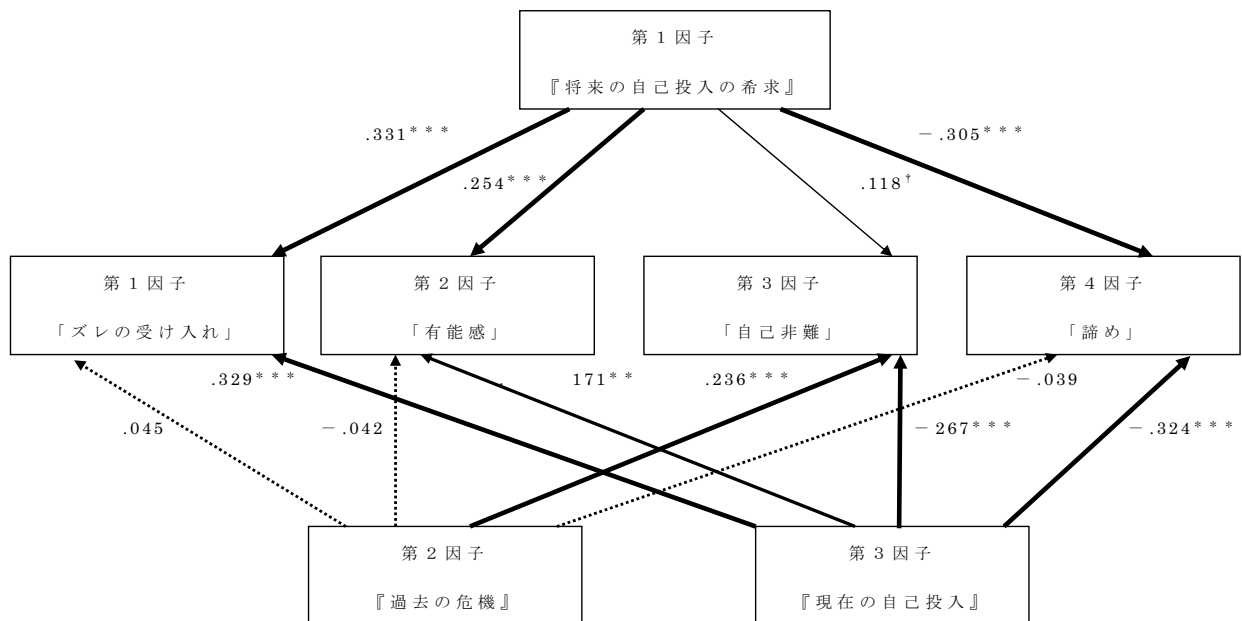
Table 2-2-3 「現在¹⁾・過去²⁾・将来³⁾→理想→現実ズレ⁴⁾のとらえ」の重回帰分析の結果

	理想-現実ズレのとらえ			
	「ズレの受け入れ」 (n^5)=405)	「有能感」 (n)=408)	「自己非難」 (n)=406)	「諦め」 (n)=406)
『現実の自己投入』	.329***	.171**	-.267***	-.324***
『過去の危機』	.045	-.042	.236***	-.039
『将来の自己投入の希求』	.331***	.254***	.118†	-.305***
重相関係数 (R)	.588***	.353***	.321***	.555***

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

注) 数値は標準偏回帰係数 (β) を表す。

¹⁾『現在の自己投入』 ²⁾『過去の危機』 ³⁾『将来の自己投入の希求』 ⁴⁾理想自己と現実自己とのズレ ⁵⁾n は人数を表す。



注) (各数値はβ係数を表す) ***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

1)『現在の自己投入』 2)『過去の危機』 3)『将来の自己投入の希求』 4)理想自己と現実自己とのズレ

図1 「現在¹⁾・過去²⁾・将来³⁾→理想→現実ズレ⁴⁾のとらえ」の重回帰分析の結果

数は、 $(\beta)=.17$ ($t(407)=3.24$, $p<.01$, 両側検定)であったが、『過去の危機』の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.04$ ($t(407)=-0.83$, n.s., 両側検定)であり、有意ではなかった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、 $R^2=.12$ であり有意であった ($F(3,407)=19.35$, $p<.001$)。

また、理想-現実ズレのとらえ第3因子「自己非難」においては、『将来の自己投入の希求』の偏回帰係数は、有意傾向になり、 $(\beta)=.12$ ($t(405)=2.07$, $p<.10$, 両側検定)であった。『過去の危機』の偏回帰係数は、 $(\beta)=.24$ ($t(405)=4.60$, $p<.001$, 両側検定)であったが、『現在の自己投入』の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.27$ ($t(405)=-4.96$, $p<.001$, 両側検定)であった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、 $R^2=.09$ であり有意であった ($F(3,405)=15.55$, $p<.001$)。

最後に、理想-現実ズレのとらえ第4因子「諦め」に及ぼす影響においては、『将来の自己投入の希求』の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.31$ ($t(408)=-6.154$, $p<.001$, 両側検定)であり、『現在の自己投入』の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.32$ ($t(408)=-6.92$, $p<.001$, 両側検定)であり、『過去の危機』の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.04$ ($t(408)=4.60$, n.s., 両側検定)であったが、有意ではなかった。したがって、理想-現実ズレのとらえ第4因子「諦め」

に及ぼす影響は、『将来の自己投入の希求』『現在の自己投入』のいずれにおいても負の影響を及ぼすことが示された。なお、この時の回帰式全体の説明率は、 $R^2=.30$ であり有意であった ($F(3,408)=60.71$, $p<.001$)。

(2-2)理想自己と現実自己とのズレにおける対処に及ぼす影響について

重回帰分析の結果についてみていく (Table 2-2-4, 図2 参照)。まず、理想-現実ズレの対処第1因子「理想への接近」に対する影響において、『将来の自己投入の希求』の偏回帰係数は、 $(\beta)=.32$ ($t(406)=6.89$, $p<.001$, 両側検定)であり、『現在の自己投入』の偏回帰係数は、 $(\beta)=.42$ ($t(406)=9.65$, $p<.001$, 両側検定)であったが、『過去の危機』の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.00$ ($t(406)=-0.09$, n.s., 両側検定)となり、有意ではなかった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、 $R^2=.40$ であり有意であった ($F(3,406)=91.86$, $p<.001$)。

次に、理想-現実ズレの対処第2因子「理想の割引」に及ぼす影響については、『将来の自己投入の希求』の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.15$ ($t(406)=-2.70$, $p<.01$, 両側検定)であり、『現在の自己投入』の偏回帰係数は、 $(\beta)=-.26$ ($t(406)=-4.80$, $p<.001$, 両側検定)であった。『過去の危

Table 2-2-4 「現在¹⁾・過去²⁾・将来³⁾→理想→現実ズレ⁴⁾の対処」の重回帰分析の結果

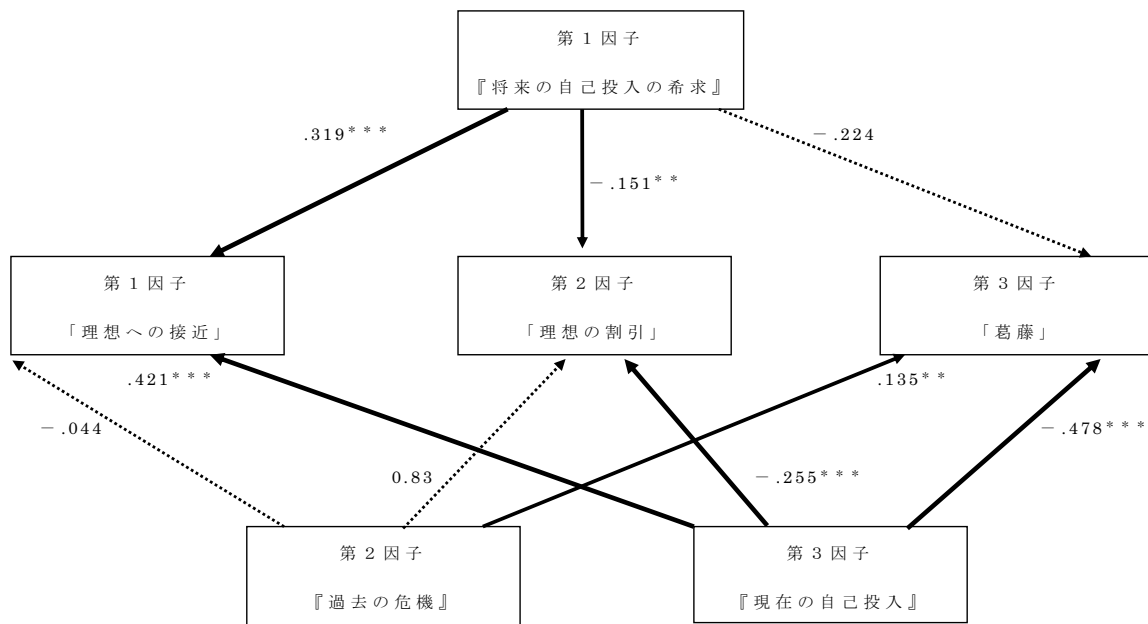
	理想-現実ズレの対処		
	「理想への接近」 (n ⁵⁾ =406)	「理想の割引」 (n=406)	「葛藤」 (n=409)
『現実の自己投入』	.421***	-.255***	-.478***
『過去の危機』	-.004	.083	.135**
『将来の自己投入の希求』	.319***	-.151**	-.224
重相関係数 (R)	.636***	.334***	.475***

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

注) 数値は標準偏回帰係数 (β) を表す。

1) 『現在の自己投入』 2) 『過去の危機』 3) 『将来の自己投入の希求』 4) 理想自己と現実自己とのズレ

5) n は人数を表す。



注) (各数値はβ係数を表す) ***p<.001, **p<.01

1) 『現在の自己投入』 2) 『過去の危機』 3) 『将来の自己投入の希求』 4) 理想自己と現実自己とのズレ

図2 「現在¹⁾・過去²⁾・将来³⁾→理想→現実ズレ⁴⁾の対処」の重回帰分析の結果

機』の偏回帰係数は、(β)=.08 (t(406)=1.64, n.s., 両側検定)であり、有意でなかった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、R²=.10であり有意であった (F(3,406)=16.99, p<.001)。

最後に、理想-現実ズレの対処第3因子「葛藤」の場合は、『過去の危機』の偏回帰係数は、(β)=.14 (t(409)=2.82, p<.01, 両側検定)であり、『現在の自己投入』の偏回帰係数は、(β)=-.48 (t(409)=-9.66, p<.001, 両側検定)であったが、『将来の自己投入の希求』の偏回帰係数は、(β)=-.22 (t(409)=-0.42, n.s., 両側検定)となり、有意でなかった。なお、この時の回帰式全

体の説明率は、R²=.22であり有意であった (F(3,409)=39.68, p<.001)。

考察

ここでは研究2-2の(1),(2)の結果についてまとめて考察していくこととする。

第1に、『将来の自己投入の希求』が理想-現実ズレのとらえ及び対処に及ぼす影響についてみていく。まず、理想-現実ズレのとらえについては、第1因子「ズレの受け入れ」、第2因子「有能感」に正の影響を、第4因子「諦め」には負の影響を与えることが示されたが、第3因子「自己非難」では有意な結果が得られなかった。一方理想-現実ズレ

レの対処との関連については、第1因子「理想への接近」に正の影響を、第2因子「理想の割引」に負の影響を与えることが示されたが、第3因子「葛藤」では有意な結果が得られなかった。これに関しては、『将来の自己投入の希求』は“私は、一生けんめいのうちこめるものを積極的に探し求めている”“私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている”など将来の自分が熱中できるものを探そうと頑張っているという内容で構成されていることを考えると、将来なりたい自分の理想像を探し求めることは、理想と現在の自分のズレを受け入れることや、ズレは埋められるものであると感じることにつながり、理想と現実の自分とのズレを感じても簡単に諦めることにはならないのではないかと推察される。『将来の自己投入の希求』は、理想－現実ズレを感じた時の対処においても自分の理想像を重要なものとして位置付け、理想の自分を追求していくことにつながりやすいと解釈される。

第2に、『過去の危機』が理想－現実ズレのとらえ及び対処に及ぼす影響についてみると、理想－現実ズレのとらえにおいては、第3因子「自己非難」においてのみ有意となり、正の影響を、理想－現実ズレの対処においては、第3因子「葛藤」においてのみ有意となり、正の影響を与えることが示された。ここで『過去の危機』の内容をみると、“私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある”“私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある”というものである。すなわち、自分への迷いや疑問を感じた経験があるほど、理想－現実ズレに対する責任は自分にあるものとしてとらえやすく、そのズレに対する対処においても具体的な対処の仕方を考えることより、“ズレに対してどうしたらよいかかわからない”というように葛藤に陥りやすくなることが示された。これらの結果を合わせて考えると、過去に自分自身について悩んだ経験だけでは、理想－現実ズレをうまくとらえ、対処していくことにはつながりにくいのではないかと推察される。

第3に、『現在の自己投入』が理想－現実ズレのとらえ及び対処に及ぼす影響についてみると、まず、理想－現実ズレのとらえにおいては、第1因子

「ズレの受け入れ」、第2因子「有能感」に正の影響を、第3因子「自己非難」、第4因子「諦め」には負の影響を与えることが示された。それに対して、理想－現実ズレの対処においては、第1因子「理想への接近」に正の影響を、第2因子「理想の割引」、第3因子「葛藤」に負の影響を与えることが示された。『現在の自己投入』には、“私は今、自分の目標をなしとげるために努力している”“私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている”という内容が含まれる。つまり、目標に向かって努力することは、こんなことがしたい、という理想の確かなイメージが生じることや、理想－現実ズレを受け入れたり、自分自身の力で解決できるものとしてとらえたりすることにつながりやすいと思われる。また、現在の自分が目標に向かって努力することによって、理想－現実ズレがあっても自分を非難することはなく、かつ、諦めずに粘り強くそのズレを解決していけるのではないかと推察される。

一方、理想－現実ズレに対する対処においても『現在の自己投入』は、理想への接近行動を起こしやすくするものと示された。また、『現在の自己投入』が積極的に行われるとき、理想の自分に意味を見出すことができ、理想を実現可能なものに引き下げたり、ズレの解決について悩んだりすることは少なくなるのではないかと考えられる。

以上の結果から、『将来の自己投入の希求』『現在の自己投入』によって、理想－現実ズレを感じた時そのズレを受け入れ、諦めることなく解決できるものとしてとらえ、かつ理想を下げることなく理想へ接近するため、前向きに対処していくことができるかと解釈される。特に理想－現実ズレに対するとらえ及び対処因子「自己非難」「葛藤」についてみると、『現在の自己投入』はいずれにおいても負の影響が示されたが、『過去の危機』はいずれにおいても正の影響がみられた。つまり『過去の危機』の経験の多さは理想－現実ズレを感じた時、その原因を自分に帰属させ、葛藤に陥りやすくなることを示された。このことから『過去の危機』の経験だけでなく、『現在の自己投入』が伴ったとき、理想－現実ズレに対して前向きなとらえ方や適切な対処ができるのではないかと推察される。

3. アイデンティティ・ステイタスによる理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処の差についての検討(研究2-3)

目的

アイデンティティ・ステイタスによる理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処の差について検討し、円滑な自己形成につなげるためには、理想-現実ズレをどのようにとらえ、対処していけばよいのかを明らかにすることを目的とする。

方法

調査時期・対象者：研究2-2と同様

調査内容

①アイデンティティ・ステイタスの測定について：加藤(1983)の同一性地位判定尺度を用い、アイデンティティ・ステイタスの判定を行った(Table 1, Table 2-3-1 参照)。

②理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処について：研究2-1で作成された尺度を用いた。

分析手続き：アイデンティティ・ステイタスおよび性別(男・女)を独立変数とし、理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処を従属変数とする分散分析を実施する。ただし、権威受容地位群については人数が少なかったため、除いて分析を行った(Table 2-3-1 参照)。なお、本研究では、分散分析の結果が有意である場合、全てにおいて下位検定としてLSD法による多重比較を行う(Table 2-3-2, Table 2-3-3 参照)。また、以下の結果及び考察において、アイデンティティ・ステイタスについては、[同一性達成地位群]を[達成群]、[A-F中間地位群]を[A-F中間群]、[積極的モラトリアム地位群]を[積極的モラトリアム群]、[D-M中間地位群]を[D-M中間群]、[同一性拡散地位群]を[拡散群]と略すこととする。

中間地位群]を[D-M中間群]、[同一性拡散地位群]を[拡散群]と略すこととする。

結果及び考察

1. アイデンティティ・ステイタスによる理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえの差について

ここでは先に、各アイデンティティ・ステイタスの特徴について述べていくこととする。

まず、[達成群]及び[A-F中間群][積極的モラトリアム群]の3つの群の各特徴についてみていく。[達成群]及び[A-F中間群]は、『現在の自己投入』の値及び『過去の危機』の値を基準に分類される群である。この二つの群は『過去の危機』の値においては[A-F中間群]は[達成群]より低いという違いがあるが、『現在の自己投入』の値において同様に高い群である。よって、[A-F中間群]は、[達成群]には及ばないものの、過去に自分がやりたいことについて真剣に悩み考えた経験があり、[達成群]と同様に現在目標に向かって努力している群である。

これに対して、[積極的モラトリアム群]は『現在の自己投入』と『将来の自己投入の希求』とを基準に分類される群であり、『現在の自己投入』の値は[達成群][A-F中間群]より低いが、『将来の自己投入の希求』の値が比較的高い群である。つまり、[積極的モラトリアム群]は、現在においては[達成群][A-F中間群]ほど現在打ち込めるものがあるわけではないが、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている群である。

これらのことから、[達成群][A-F中間群][積極的モラトリアム群]は現在あるいは将来に向かって多大な努力を行っておりアイデンティティ形成の程度が比較的高い群である(Marcia, J.E, 1966)といえる。

Table 2-3-1 アイデンティティ・ステイタスの群分けの結果

	達成群 ¹⁾	A-F中間群 ²⁾	権威受容群 ³⁾	積極的モラトリアム群 ⁴⁾	D-M中間群 ⁵⁾	拡散群 ⁶⁾	計
男	20名	20名	8名	14名	93名	17名	172名
女	21名	31名	5名	23名	137名	24名	241名
計	41名	51名	13名	37名	230名	41名	413名

1)同一性達成地位群 2)権威受容地位群 3)A-F中間地位群(同一性達成-権威受容中間地位群) 4)積極的モラトリアム地位群

5)D-M中間地位群(同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位群) 6)同一性拡散地位群

Table 2-3-2 アイデンティティ・ステイタスおよび性による理想－現実ズレ¹⁾のとりえに関する
尺度各因子項目合計得点の平均とSD および分散分析の結果

		性	M (S D)	N	主効果	交互作用	下位検定
「ズレの受け入れ」	達成群 ²⁾	男	52.00 (6.39)	20	F(4,378)=31.11**	n. s.	達成群>積極的モラトリアム群> D-M中間群>拡散群; A-F中間群>D-M中間群>拡 散群
		女	52.57 (4.99)	21			
		計	52.29 (5.65)	41			
	A-F中間群 ³⁾	男	50.79 (5.77)	19			
		女	51.00 (5.65)	31			
		計	51.36 (5.65)	50			
	積極的モラトリアム群 ⁴⁾	男	50.36 (5.93)	14			
女		47.68 (6.81)	22				
計		48.72 (6.53)	36				
D-M中間群 ⁵⁾	男	44.53 (7.90)	92				
	女	44.50 (6.68)	135				
	計	44.51 (7.18)	227				
拡散群 ⁶⁾	男	37.94 (9.91)	17				
	女	38.58 (8.70)	24				
	計	38.32 (9.11)	41				
全体			45.93 (8.05)	395			
「有能感」	達成群	男	21.80 (5.29)	20	F(4,378)=7.23***	n. s.	達成群, A-F中間群>D-M中間 群>拡散群; 積極的モラトリアム群>拡散群
		女	22.33 (2.58)	21			
		計	22.07 (4.08)	41			
	A-F中間群	男	21.78 (4.25)	18			
		女	22.35 (2.65)	31			
		計	22.14 (3.30)	49			
	積極的モラトリアム群	男	20.29 (3.29)	14			
女		21.30 (4.15)	23				
計		20.92 (3.83)	37				
D-M中間群	男	20.29 (3.89)	92				
	女	20.48 (2.99)	137				
	計	20.41 (3.37)	229				
拡散群	男	19.41 (4.11)	17				
	女	18.17 (3.12)	24				
	計	18.68 (3.57)	41				
全体			20.66 (3.62)	397			
「自己非難」	達成群	男	22.95 (4.47)	19	n. s.	F(4,378)=3.58**	達成群:男>女; A-F中間群:男>女; 男:達成群>D-M中間群, 拡散群
		女	18.00 (4.55)	21			
		計	20.35 (5.11)	40			
	A-F中間群	男	20.05 (3.88)	19			
		女	17.81 (4.58)	31			
		計	18.66 (4.42)	50			
	積極的モラトリアム群	男	20.23 (5.45)	13			
女		20.17 (4.91)	23				
計		20.19 (5.03)	36				
D-M中間群	男	18.75 (4.71)	92				
	女	19.55 (4.77)	137				
	計	19.23 (4.75)	229				
拡散群	男	19.82 (4.43)	17				
	女	19.96 (5.74)	24				
	計	19.90 (5.18)	41				
全体			19.43 (4.82)	396			
「諦め」	達成群	男	11.60 4.19	20	F(4,378)=31.42***	n. s.	拡散群>D-M中間群>積極的モラ トリアム群, A-F中間群, 達成群
		女	12.24 3.67	21			
		計	11.93 3.89	41			
	A-F中間群	男	12.35 3.83	20			
		女	11.13 3.24	31			
		計	11.61 3.50	51			
	積極的モラトリアム群	男	12.14 3.68	14			
女		13.35 3.55	23				
計		12.89 3.60	37				
D-M中間群	男	15.20 4.52	92				
	女	15.31 3.60	136				
	計	15.26 3.99	228				
拡散群	男	20.71 4.98	17				
	女	19.17 5.55	24				
	計	19.80 5.32	41				
全体			14.70 (4.62)	398			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

1)理想自己と現実自己とのズレ 2)同一性達成地位群 3)A-F中間地位群(同一性達成-権威受容中間地位群) 4)積極的モラトリアム地位群

5)D-M中間地位群(同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位群) 6)同一性拡散地位群

Table 2-3-3 アイデンティティ・ステイタスおよび性による理想-現実ズレ¹⁾の対処に関する尺度各因子項目合計得点の平均とSDおよび分散分析の結果

		性	M (S D)	N	主効果	交互作用	下位検定
「理想への接近」	達成群 ²⁾	男	60.55 (6.18)	20	F(4,381)=38.92**	n. s.	A-F中間群, 達成群>積極的モラトリアム群>D-M中間群>拡散群
		女	60.48 (5.87)	21			
		計	60.51 (5.95)	41			
	A-F中間群 ³⁾	男	59.40 (5.43)	20			
		女	60.26 (6.35)	31			
		計	59.92 (5.96)	51			
	積極的モラトリアム群 ⁴⁾	男	58.23 (6.81)	13			
女		55.74 (6.83)	23				
計		56.64 (6.83)	36				
D-M中間群 ⁵⁾	男	51.58 (8.41)	91				
	女	51.57 (6.16)	136				
	計	51.58 (7.13)	227				
拡散群 ⁶⁾	男	44.82 (11.55)	17				
	女	44.96 (8.44)	24				
	計	44.90 (9.71)	41				
全体			53.35 (8.48)	396			
「理想の割引」	達成群	男	18.20 (4.53)	20	F(4,381)=9.34***	n. s.	拡散群>積極的モラトリアム群; 拡散群>D-M中間群>達成群, A-F中間群; 男>女
		女	16.00 (5.06)	19			
		計	17.13 (4.86)	39			
	A-F中間群	男	18.25 (6.90)	20			
		女	15.26 (4.03)	31			
		計	16.43 (5.48)	51			
	積極的モラトリアム群	男	18.64 (5.73)	14			
女		17.30 (5.61)	23				
計		17.81 (5.62)	37				
D-M中間群	男	19.74 (5.66)	92				
	女	19.26 (4.64)	137				
	計	19.45 (5.07)	229				
拡散群	男	22.50 (5.98)	16				
	女	22.04 (4.62)	24				
	計	22.23 (5.14)	40				
全体			18.96 (5.37)	396			
「葛藤」	達成群	男	11.30 (3.84)	20	F(4,381)=16.39**	F(4,381)=2.88*	D-M中間群: 女>男; 男: 拡散群>達成群, A-F中間群, 積極的モラトリアム群, D-M中間群;
		女	9.67 (3.61)	21			
		計	10.46 (3.77)	41			
	A-F中間群	男	10.15 (3.27)	20			女: 拡散群>D-M中間群, 積極的モラトリアム群>A-F中間群, 達成群
		女	9.03 (2.83)	31			
		計	9.47 (3.03)	51			
	積極的モラトリアム群	男	11.21 (3.26)	14			
女		12.04 (3.23)	23				
計		11.73 (3.22)	37				
D-M中間群	男	11.63 (3.22)	92				
	女	12.80 (3.10)	137				
	計	12.33 (3.20)	229				
拡散群	男	14.18 (3.00)	17				
	女	14.38 (3.06)	24				
	計	14.29 (3.00)	41				
全体			11.92 (3.46)	399			

***p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.10

1)理想自己と現実自己とのズレ 2)同一性達成地位群 3)A-F中間地位群(同一性達成-権威受容中間地位群) 4)積極的モラトリアム地位群

5)D-M中間地位群(同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位群) 6)同一性拡散地位群

一方、〔D-M中間群〕〔拡散群〕の特徴についてみると、この2つの群は〔積極的モラトリアム群〕と共に『現在の自己投入』と『将来の自己投入の希求』の値とを基準に分類される群である。この2つの群は、『現在の自己投入』の値において〔達成群〕より低く、『将来の自己投入の希求』の値において、〔積極的モラトリアム群〕より低い。また、〔D-M中間群〕は、〔拡散群〕より『現在の自己投入』あるいは『将来の自己投入』

の値において少なくともどちらかが高い群であるが、〔D-M中間群〕〔拡散群〕は共に、現在、将来いずれにおいても高い水準の自己投入は行なっているとはいえず、アイデンティティ形成の程度が比較的低い(Marcia, J.E. 1966)群であるといえる。

以下のアイデンティティ・ステイタスによる理想-現実ズレにおけるとらえ及び対処の差については「研究2-2」での「現在の自己投入」「過去

の危機」「将来の自己投入の希求」が理想－現実ズレにおけるとらえ及び対処に及ぼす影響についての重回帰分析の結果を合わせて検討していく。

(1) 第1因子「ズレの受け入れ」について

「ズレの受け入れ」において、アイデンティティ・ステータスの主効果においてのみ有意となり ($F(4,378)=31.11, p<.01$)、下位検定の結果、〔達成群〕〔積極的モラトリアム群〕〔D－M中間群〕〔拡散群〕の順に得点が高く、〔A－F中間群〕が〔D－M中間群〕〔拡散群〕より得点が高かった ($Mse=49.38, p<.05$)。

ここで、〔達成群〕〔A－F中間群〕〔積極的モラトリアム群〕は〔D－M中間群〕〔拡散群〕と比較して『現在の自己投入』または『将来の自己投入の希求』の値が高い群であると説明されるが、『現在の自己投入』『将来の自己投入の希求』が「ズレの受け入れ」に正の影響を与えていることを合わせて考えると、〔達成群〕〔A－F中間群〕〔積極的モラトリアム群〕が〔D－M中間群〕〔拡散群〕より理想－現実ズレを受け入れやすいのは、今現在目標を成し遂げるために努力していたり、一生懸命に打ち込めるものを探し求めていることによると解釈される。

よって、〔達成群〕〔A－F中間群〕のように過去に自分のあるべき姿について迷い考えた経験が有り、現在目標に向かって努力していたり、〔積極的モラトリアム群〕のように現在高い水準の自己投入を行っていないが、打ち込めるものを探し求めたりする場合、自分について真剣に悩み考えた経験に基づいて現在の自分について理解していることや、これからの自分が何をしたいかが明確であることが、理想－現実ズレがあっても、ズレを埋めるべきものとして受け入れやすいことにつながると推察される。

(2) 第2因子「有能感」について

「有能感」において、アイデンティティ・ステータスの主効果においてのみ有意となり ($F(4,378)=7.23, p<.001$)、下位検定の結果、〔達成群〕及び〔A－F中間群〕が最も高く、〔D－M中間群〕〔拡散群〕の順に得点が高くなり、〔積極的モラトリアム群〕が〔拡散群〕より高かった ($Mse=12.28, p<.05$)。

各群の特徴から、〔達成群〕〔A－F中間群〕〔積極的モラトリアム群〕は〔拡散群〕より『現

在の自己投入』と『将来の自己投入の希求』のどちらかが高いといえる。

つまり、〔達成群〕〔A－F中間群〕〔積極的モラトリアム群〕が〔拡散群〕より「有能感」において高い得点を示したが、『現在の自己投入』と『将来の自己投入の希求』が「有能感」に正の影響を与えたことを合わせて考えると、〔達成群〕〔A－F中間群〕〔積極的モラトリアム群〕が〔拡散群〕より理想－現実ズレを自分の力で埋められるものとしてとらえやすいのは、過去に自身について悩んだ経験を生かした現在の目標への努力と、目標への意欲や積極的な探索によるものと解釈される。

すなわち、〔達成群〕〔A－F中間群〕のように現在、目標を成し遂げるために努力していたり、〔積極的モラトリアム群〕のようにこれから何か打ち込めるものを探し求めていることは、理想－現実ズレがある場合、将来を見据えて努力し、ズレを自分の力でなくすことができるととらえやすいことにつながると予想される。

以上のことから、アイデンティティ形成の程度が高いほど、現在、目標が明確であり、やりたいことを探索しているといえる。そのような場合、「ズレの受け入れ」においても示されたように、理想と今の自分にズレがあるからこそ努力すべきであるとズレを受け入れながら、理想の自分に近づくことができるというようにズレを前向きにとらえ、円滑な自己形成につなげていくのではないかと予想される。

(3) 第3因子「自己非難」について

「自己非難」については、アイデンティティ・ステータスと性の交互作用が見られた ($F(4,378)=3.58, p<.01$)。以下、下位検定の結果についてみていく。群における性の単純主効果に関しては、〔達成群〕及び〔A－F中間群〕のいずれにおいても男性が女性より高い得点を示したが、他の3つの群では性による有意な差が見られなかった。

一方、性における群の単純主効果については、男性においてのみ有意となり、〔達成群〕が、〔D－M中間群〕〔拡散群〕より高い得点を示した ($Mse=21.42, p<.05$)。

つまり、〔達成群〕〔A－F中間群〕のように今現在目標に向かって努力している場合、男性は女性より理想－現実ズレが生じることに對してその

責任を自分に帰属させやすく、男性の中でのアイデンティティ・ステイタスによる比較においても、このことが示された。

これについては、目標に向かって努力している場合に、明確な理想のイメージがあることから、現在の自分と理想とのズレを認識しやすく、そのことが理想-現実ズレが生じた責任を自分自身により帰属させることにつながりやすいと推察される。

ところが、本研究においては特に男性においてのみ、このことが示された。これに関しては、男女のどのような特性によるものかについてさらなる検討が必要であろう。

(4) 第4因子「諦め」について

「諦め」に関しては、アイデンティティ・ステイタスにおいてのみ主効果が見られ ($F(4,378)=31.42, p<.001$)、下位検定の結果、〔拡散群〕が〔D-M中間群〕より得点が高く、この2つの群は他の3つの群より高かった ($Mse=16.34, p<.05$)。

ここで、〔拡散群〕〔D-M中間群〕は、他の3つの群と比較して、『現在の自己投入』または『将来の自己投入の希求』の値が低い群である。

つまり、『現在の自己投入』と『将来の自己投入の希求』が「諦め」に負の影響を与えたことを考慮すると、〔拡散群〕〔D-M中間群〕の場合、その他の群より理想-現実ズレはあっても仕方がないものとしてとらえやすいのは、今現在打ち込めるものがなく、また打ち込めるものを積極的に探し求めているわけでもないということによると考えられる。

すなわち、〔拡散群〕〔D-M中間群〕のように今現在目標とするものがないことや、打ち込めるものを探し求めていることは、理想-現実ズレがあっても特に何かをしようとは思えず、理想に近づけないのは仕方がないこととして諦めやすいことにつながると推察される。

以上のことから、アイデンティティ形成の程度が低いほど、今現在打ち込めるものやこれから努力する意思がなく、そのような場合、理想-現実ズレに対して理想は努力により近づけるものとしてとらえにくく、理想通りになるのは不可能なこととして理想の実現を諦め、それが自己形成につながることを難しくするのではないだろうか。

2. 理想自己と現実自己とのズレにおける対処につ

いて

(1) 第1因子「理想への接近」について

「理想への接近」については、アイデンティティ・ステイタスの主効果においてのみ有意となり ($F(4,381)=38.92, p<.01$)、下位検定の結果、〔達成群〕及び〔A-F中間群〕において最も得点が高く、以下〔積極的モラトリアム群〕〔D-M中間群〕〔拡散群〕の順に得点が高かった ($Mse=51.36, p<.05$)。

ところが、「理想への接近」において、〔達成群〕〔A-F中間群〕〔積極的モラトリアム群〕は、〔D-M中間群〕〔拡散群〕と比較して、『現在の自己投入』『将来の自己投入の希求』のどちらかが高い群であるが、『現在の自己投入』『将来の自己投入の希求』が「理想への接近」に正の影響を与えたことを考慮すると、〔達成群〕〔A-F中間群〕〔積極的モラトリアム群〕の場合、〔D-M中間群〕〔拡散群〕より理想に近づけるように対処しやすいのは、目標を達成のための努力と、打ち込めるものの積極的な探索によると考えられる。

つまり、〔達成群〕〔A-F中間群〕のように過去にある程度自分について悩んだ経験があり、かつ打ち込めるものがあったり、〔積極的モラトリアム群〕のように打ち込めるものを探し求めていたりすることは、理想を具体的にイメージし、近づく方法を模索、実行していくことにつながると予想される。

したがって、アイデンティティ形成の程度が高いほど、特に自分について理解している、またはこれから何がしたいかが明確であるといえるが、そのような場合、理想の実現に結びつく様々な経験をしやすく、それが現実の自分を修正しながら、円滑な自己形成をすることにつながるのではないかと推察される。

(2) 第2因子「理想の割引」について

「理想の割引」では、アイデンティティ・ステイタスの主効果において有意となり ($F(4,381)=9.34, p<.001$)、下位検定の結果〔拡散群〕が、他の全ての群より高い得点を示し、〔D-M中間群〕が〔達成群〕及び〔A-F中間群〕より高かった ($Mse=26.58, p<.05$)。

〔拡散群〕〔D-M中間群〕は『現在の自己投入』『将来の自己投入の希求』が他の群より低い群であるが、『現在の自己投入』『将来の自己投入の希

求』が「理想の割引」に負の影響を与えていることを合わせて考えると、〔拡散群〕〔D-M中間群〕が〔達成群〕〔A-F中間群〕より「理想の割引」において高い得点を示したのは、何がしたいかというイメージが明確ではなく、打ち込めるものへの探索が少ないことによると思われる。

ここで、理想-現実ズレのとらえ「諦め」においても〔拡散群〕〔D-M中間群〕が〔達成群〕〔A-F中間群〕より高い得点を示しているという同様の結果が得られたことを考慮すると、自分がどんな人間であるのか理解しておらず、これから何をしたいかが明確でないほど、今の理想を実現することを諦めやすいことが考えられ、それにより自分が比較的实现可能なものへ理想を引き下げやすくなるのではないだろうか。

以上のことから、〔拡散群〕のようにアイデンティティ形成の程度が低いほど、目標達成のための努力がなく、目標探索の意思が弱いといえる。よって、そのような場合、理想-現実ズレを感じた時に、理想の追求ができず、諦めて自分が実現できるものに引き下げやすいことが考えられ、これは自己形成を難しくする一つの原因になるのではないかと推察される。

また、性の主効果が有意傾向となり ($F(1,381)=3.56, p<.10$)、男性が女性より、「理想の割引」の得点が高い傾向が示された。

これについては、理想-現実ズレに対して男性は女性より理想を自分に近いものに引き下げるといふ対処方法を取りやすいと考えられたが、青年期の男性は現状を肯定的に解釈して理想を変えることでズレを減少させるが、女性は粘り強く現実を理想に近づけることでズレを減少させようとする傾向があるという松岡(2006)の指摘から、本研究の結果はこれを裏づけるものとして考えられる。

(3) 第3因子「葛藤」について

「葛藤」において、アイデンティティ・ステータスと性の交互作用が見られ、下位検定の結果 ($F(4,381)=2.88, p<.05$)、男性、女性のいずれにおいても、〔拡散群〕が、最も「葛藤」の得点が高く ($Mse=10.83, p<.05$)、また、女性においては〔D-M中間群〕〔積極的モラトリアム群〕が〔A-F中間群〕〔達成群〕より高かったが ($Mse=9.76, p<.05$)、〔D-M中間群〕においては、

男性より女性の方が高い得点を示した。

このように男女いずれにおいても、〔拡散群〕が最も「葛藤」の得点が高かったが、〔拡散群〕は『現在の自己投入』『将来の自己投入の希求』のいずれも低い群である。そこで、『現在の自己投入』及び『将来の自己投入の希求』が「葛藤」に負の影響を与えたことを合わせて考えると、今現在打ち込めるものがなく、これから何をしたいかが不明確であるほど、理想-現実ズレに直面した場合、葛藤状態に陥りやすいといえる。

このことから、今現在取り組むものや、自分が熱中できるものを探す意欲がないことは、理想への対処方法がうまく見出せず、理想に近づきたいと思うことにおいても、どうすべきか悩み、葛藤状態に陥ることにつながると考えられる。

ところが、〔D-M中間群〕のように目標に向かっての努力が少なく、積極的に目標を求めているわけでもない場合に、女性は男性より葛藤状態に陥りやすく、女性におけるアイデンティティ・ステータスによる比較においても〔拡散群〕〔D-M中間群〕〔積極的モラトリアム群〕のように今現在打ち込めるものがない、また明確であるとはいえない場合に葛藤状態に陥りやすいことが示された。つまり女性は男性より、自分が何をしたいのかが明確でなく、やりたいものを探し求めているほど、理想-現実ズレに対してどのように対処すべきか悩んでしまうと解釈される。

これについては、一般的に、女性が男性より自分についての評価が低いという山本・松井・山成(1982)の指摘を関連づけて考えると、特に望むものがなく、これからそれを探す意思もないという状況にある場合、女性は男性より自分に対する評価が低くなりやすく、そのことから自分に自信を持たず、理想に近づきたいと思う場合においても、対処方法に悩むという状況に陥りやすいのではないだろうか。しかし、これについては女性のどのような特性によるものかについて細心の検討が必要であろう。

全体的考察

本研究の主な目的は、アイデンティティ・ステータスにより、理想自己と現実自己とのズレのとらえ及び対処がどのように異なるのかを明らかにすることである。そこで、理想-現実ズレのとらえ及び対

処について尺度の作成を行い、検討を行った。これらの主な結果について考察していくこととする。

I. 理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処についての尺度の作成

まず、予備調査により、実際に理想－現実ズレを感じた際、ズレをどのようにとらえており、またどのように対処しているのかを調べた。それによって、理想－現実ズレのとらえ及び対処の測定項目を作成し、因子分析を行った。その結果、理想－現実ズレのとらえとしては、ズレを自分自身の問題として受け入れる「ズレの受け入れ」、ズレは必ず埋められると感じている「有能感」、ズレが生じているのは自分の責任であるにとらえる「自己非難」、ズレの解決は諦めてしまえばよいにとらえる「諦め」の4つの因子として示された。因子ごとの α 係数は順に0.90, 0.61, 0.79, 0.80であった。また、ズレへの対処としては、自分の理想像に近づいていこうとする「理想への接近」、理想を今の自分に近いものに引き下げる「理想の割引」、ズレの解決方法をどうしたら良いのか悩む「葛藤」の3つの因子が抽出された。因子ごとの α 係数は順に0.90, 0.83, 0.68であった。

このことから、理想－現実ズレのとらえ第2因子「有能感」、理想－現実ズレの対処第3因子「葛藤」を除いた全ての因子において高い信頼性が得られたといえよう。

II. アイデンティティ・ステイタスによる理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処との関連について

はじめに、本研究のアイデンティティ・ステイタスの測定において、加藤(1987)の同一性地位判定尺度を用いた。ここでは、加藤(1987)の尺度におけるアイデンティティ・ステイタスの分類基準となる『将来の自己投入の希求』『過去の危機』『現在の自己投入』の、理想－現実ズレのとらえ及び対処への影響を踏まえ、アイデンティティ・ステイタスによる理想自己と現実自己とのズレにおけるとらえ及び対処の差について考察していく。

まず、『現在の自己投入』の値が他の群より高く、『過去の危機の値』がある程度高い群として分類される、〔達成群〕〔A－F中間群〕を中心にみていく。〔達成群〕〔A－F中間群〕は、〔D－M中間群〕〔拡散群〕より理想－現実ズレのとらえ因子「ズレの受け入れ」「有能感」、理想－現実

ズレの対処因子「理想への接近」において高い得点を示し、「諦め」において、低い得点を示したが、〔達成群〕〔A－F中間群〕の特徴は、『現在の自己投入』『過去の危機』においてその値が高いことである。

ここで、『現在の自己投入』が「ズレの受け入れ」「有能感」「理想への接近」に正の影響を与え、また「諦め」に負の影響を与えていることを考慮すると、〔達成群〕〔A－F中間群〕の場合、〔D－M中間群〕〔拡散群〕より現在目標に向かってより多くの努力をしていることから、〔達成群〕〔A－F中間群〕は理想－現実ズレを自分自身の問題として受け入れ、諦めずに理想を目指して自分の力で実現できるものとしてとらえやすく、対処としては理想に近づくために努力していくと解釈される。

これらのことから、〔達成群〕〔A－F中間群〕のように過去に自分について悩んだ経験があることや、目標のために努力していることは、理想－現実ズレがあっても、自分の力で埋められるものとしてズレを受け入れ、理想を諦めずに近づくためにできることを模索しながら、自己の形成に生かしていくことにつながると推察される。

次に、『現在の自己投入』『将来の自己投入の希求』値が共に低い〔拡散群〕について考察していく。

〔拡散群〕は、理想－現実ズレのとらえの「諦め」、理想－現実ズレの対処の「理想の割引」「葛藤」において、最も高い得点を示したが、〔拡散群〕は『現在の自己投入』『将来の自己投入の希求』の値が低い群である。

ここで、『現在の自己投入』『将来の自己投入の希求』が「諦め」「理想の割引」「葛藤」にそれぞれ負の影響を及ぼすことを考慮すると、〔拡散群〕の場合、今現在夢中になれるものがなく、何がやりたいかを探索していないことから、理想－現実ズレを感じた場合、理想の実現を諦めやすく、自分が達成しやすいものに理想を引き下げたり、理想の実現を望む場合においても対処方法に悩んだりしやすいと解釈される。

したがって、〔拡散群〕のような場合、目標の自覚と努力の少なさ、目標への意欲の低さが、理想とのズレがある自分を肯定したり、ズレを解決するための行動を起こしたりしにくくなることに

つながりやすく、円滑な自己形成が難しくなると推察される。

2番目に、本結果で示された性差についてみていく。

まず、「自己非難」の結果についてみると、目標に向かって努力している場合に、男性が女性より自分に責任を帰属させやすく、男性におけるアイデンティティ・ステータスの比較においてもこのことが示された。

つまり、目標に向かって努力している場合に、明確な理想のイメージがあることから、現在の自分と理想とのズレが認識されやすく、そのことが理想－現実ズレが生じた責任を自分自身により帰属させることにつながりやすいと推察されるが、特に男性においてのみこのことが示された本研究の結果は、男性のどのような特性によるものかについてさらなる検討が必要であろう。

また、男性が女性より、「理想の割引」の得点が高い傾向が示され、男性が女性より理想を実現可能性があるものに引き下げやすいと考えられる。

このことは、青年期の男性は現状を肯定的に解釈して理想を変えることでズレを減少させる傾向があるという松岡(2006)の指摘を裏づけるものといえよう。

次に本研究では、「葛藤」において、〔D－M中間群〕のように目標を成し遂げるために努力しておらず、目標を探索する意識も低い場合、女性は葛藤状態に陥りやすいことが示された。

これについては、一般的に、女性が男性より自分についての評価が低いという山本・松井・山成(1982)の指摘を関連づけて考えると、特にやりたいことがなく、それを探す意思もない場合、女性は男性より自分に対する評価が低くなりやすく、そのことから自分に自信を持たず、理想に近づきたいと思う場合においてもどう対処すべきか悩むという状況に陥りやすいのではないかと推察される。

以上のことが本研究の性差として示されたが、これらについては男女のどのような特性によるものかについて、今後さらなる検討が望まれる。

今後の課題

第一に、本研究では、より安定した自己の形成には、理想自己と現実自己とのズレを感じた際にどの

ようにとらえ、対処していくのかについて検討することを目的とし、これらをアイデンティティ・ステータスとの関連から検討を行った。

そこで自己の形成は主に自己指針を参照して行われていくのではないかと考えられ、その自己指針の一つとして理想自己をとりあげ、現実自己とのズレの観点から調べた。

ところが、小平(2004)にも指摘されているように、今後は自己指針と現実自己とのズレに着目する場合、理想自己を含めた義務自己の側面も考慮に入れるべきであろう。つまり、理想自己が現実自己の長所・短所を促進・改善していく方向として位置づけられやすい一方、義務自己は現実自己を評価する視点を取りやすいことが示されている。すなわち、自己形成において理想自己と義務自己の役割はそれぞれ異なることが考えられる。

そこで、アイデンティティ達成に向けてこのような自己指針と現実自己とのズレをどのようにとらえ、対処していくことがより望ましいかを明らかにすることによって、より安定した自己の形成について、何らかの提言ができるのではないだろうか。

第二に、上述のように、理想－現実ズレに対するとらえ及び対処においてアイデンティティ・ステータスによる差が示され、より安定したアイデンティティ・ステータスであるほど、理想－現実ズレを自分にとって肯定的なものとしてとらえ、理想を実現させるために積極的に対処するということが明らかとなった。

ところが、理想－現実ズレのとらえ因子「自己非難」、対処因子「理想の割引」「葛藤」において性による差が示され、これに関しては特に「理想の割引」「葛藤」において、部分的に先行研究を裏づけるものと解釈されたが、男女それぞれのどのような特性によるものであるかについては明らかにすることができなかった。この点をより詳細に検討することにより男女それぞれの自己との向き合い方が明らかにでき、青年期の自己形成過程についての具体的な示唆を与えることができるのではないだろうか。これらを解決することが課題として残される。

参考文献

安達喜美子・菅宮正裕 2000 自己像と自尊感情及び自己成長意欲との関連について－理想自己を捉える際の新たな観点を加えて－ 茨城大学教育

- 学部紀要 教育科学, 49, 143-155.
- 遠藤由美 1991 理想自己に関する最近の研究動向—自己概念と適応との関連で—上越大学研究紀要, 10, 19-35.
- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究 63, 214-217.
- Erikson, E.H 1959 Identity and the lifecycle. New York: W.W. Norton & Company.
- 玄田有史・曲沼美恵 2004 『ニートフリーターでもなく 失業者でもなく』 幻冬社
- Higgins, E.T. 1987 Self-discrepancy: A theory Relating self and affect. Psychological Review, 94, 319-340.
- Higgins, E.T. 1987 Self-discrepancy: What patterns of self-beliefs cause to suffer? In L. Berkowitz (Ed.), Advances in Experimental social psychology, Vol 22. New York: Academic Press. 93-136.
- 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究 第31巻, 第4号, 20-30.
- 川畑英明・今林俊一 2003 大学生における自我同一性地位と進路決定: 教育学部生の場合 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第13巻, 39-44.
- 小平英志 2000 日本人にとって理想自己と義務自己はどのように異なる自己なのか—大学生が記述する属性語とカテゴリーの分析を通して— 性格心理学研究 第8巻, 第2号, 113-124.
- 小平英志 2001 理想自己・義務自己への意識傾向の測定—自己目標志向性尺度の作成— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 第48巻, 283-289.
- 小平英志 2004 理想自己と義務自己の内在状態の差異—現実自己の参照度および関連づけられるエピソード— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 第51巻, 91-105.
- 小平英志・小塩真司 2006 理想自己の記述傾向および現実自己との不一致からみた自己愛類型の特徴 中部大学人文学部研究論集 第15号, 43-49.
- 前田基成・沢宮容子・庄司一子著 1999 生徒指導とカウンセリングの心理学 八千代出版 89-93.
- Marcia, J.E. 1966 Development and Validation of ego identity status. Journal of Personality and Social Psychology, 3, 51-558.
- Marcia, J.E. 1980 Identity in adolescence. In Adelson, J (Ed.) Handbook of Adolescent Psychology. Wiley.
- 松岡弥玲 2006 理想自己の生涯発達—変化の意味と調節過程を捉える— 教育心理学研究 第54巻, 第1号, 45-54.
- 松岡弥玲・加藤美和・神戸美香・澤本陽子・菅野真智子・詫間里嘉子・野瀬早織・森ゆき絵 2006 成人期における他者視点(子ども, 配偶者, 両親, 友人, 職場の人)の理想—現実自己のズレが自尊心に及ぼす影響—性役割観との関連から— 教育心理学研究 第54巻, 第4号, 522-533.
- 水間玲子 1998 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究 第46巻, 第2号, 131-141.
- 水間玲子 2002 理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について— 青年心理学研究 第14号, 21-39.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究 第27巻, 第3号, 28-37.
- Rogers, C.R. 1951 Client-centered therapy: Its current practice, Implications and theory. Boston, MA: Houghton Mifflin Company.
- 砂田良一 1979 自己像との関連からみた自我同一性 教育心理学研究 第27巻, 第3号, 64-70.
- 多鹿英継・鈴木真雄 発達と学習の心理学 福村出版 98-99.
- 高橋裕行 1984 自我同一性と Marcia の同一性地位面接批評的展望 教育心理学研究 第32巻, 第4号, 74-82.
- 富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関係 教育心理学研究 第45巻, 329-336.
- 都築学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究 第41巻, 第1号, 40-47.
- 塚本知恵子 2002 青年の友人関係における理想自己と現実自己のギャップが及ぼす影響に関する探索的研究 富山大学卒業論文
- 都築学 1994 自我同一性地位による時間的展望の差異—梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討— 青年心理学研究 第6号, 12-18.
- 山田剛史 2004 理想自己の視点からみた大学生

の自己形成に関する研究 パーソナリティ研究
第12巻, 第2号, 59-72.

山本真理子・松井豊・山成由起子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-69.

謝辞

本研究を実施するに当たり、質問紙調査実施に快くご了承くださいました先生方より、多大なるご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。また、質問紙調査にご協力をいただきました皆様に心から感謝申し上げます。

(2009年5月13日受付)

(2009年7月15日受理)